

『煙が目にしみる』

原案 鈴置洋孝

作 堤 泰之

登場人物

野々村浩介	(46)	故人
礼子	(43)	浩介の妻
亮太	(23)	長男・大学五年生
早紀	(18)	長女・高校三年生
桂	(71)	浩介の母
原田 泉	(42)	浩介の従姉妹
正和	(39)	泉の夫
北見栄治	(61)	故人
乾 幸恵	(32)	栄治の娘
瀬能あずさ	(29)	栄治の愛人
牧 慎一郎	(35)	レンタルビデオ店店長
江沢 務	(40)	斎場の管理人

人口十万人前後の地方都市。

春。ある斎場の待合室。

テーブルとソファのセットが二組ある。

壁には、時計、カレンダー、電車の時刻表、斎場を利用する際の注意などが書かれた紙が貼られている。

中央奥には大きな窓があり、桜の木が見えている。

出入り口は上手下手共に二つずつある。

上手側の一つは炉前ホールへ、もう一つは別な待合室へ。

下手側の一つは玄関へ、もう一つは和室、給湯室へと続いている。

午前十一時頃。

白装束の男が二人、別々のソファに座っている。野々村浩介と北見栄治である。

浩介は経かたびらを羽織り、首から頭陀袋を提げ、手には手甲、足にはきやはんをつけている。

北見は頭陀袋を持っておらず、手にきやはんをつけている。

二人はぼんやりと、窓の外の桜を眺めている。

北見
・・あつという間ですね・・ついこないだ咲いたと思ったら、もう散り始めている。

野々村
・・年のせいですかねえ・・年々、桜の咲いている期間が短くなっ
ていつてるような気がします。

北見
ええ・・特に今年は早い。

野々村
雨が多かったし・・結局花見にも行けませんでした。

北見
花見はいつもどちらへ？

野々村
ウチは毎年中央公園です。前の晩から徹夜で場所取って、家族や親戚皆で集まってドンチャン騒ぎです。

北見
いいですねえ。

野々村
おたくは？

北見 私はだいたい川べりです。
野々村 ほう。

北見 数は少ないんですが、川べりの桜並木を歩くのが好きでして。
野々村 しやれてますなあ。

北見 人の多いところが苦手なもので・
野々村 でもよかった。今日、こうしてゆつくり桜が見れて。

北見 ええ。こんなところで桜が見れるとは思いませんでした。
野々村 ・・これで桜も見納めですか・・

窓の外を、江沢が通り過ぎる。

北見、袖から煙草を取り出す。

野々村、煙草に目をやり、少し気にしている。

北見 (時計を見て)・・そろそろですね・・

野々村 ええ・・

北見 なんだか妙な気分ですね。落ち着かないっていうか・・初めてこんなもの着たせいかもしれませんか・・

野々村 サウナ入るみたいな格好ですね・・ま、多少余計なものについてはすけど。

北見 サウナか。熱いところに行くって意味じゃ似たようなもんですかね。

野々村 いや全然違うと思いますよ。サウナより圧倒的に熱いです。

北見 焼き終わるまで・・一時間ちよつとつとところですか。

野々村 年齢や健康状態によって、多少個人差はあるみたいですけどね。脂肪分の多い肉は焼けやすいとか、筋肉質だと焼けないとかか？

野々村 どうでしょう・・できればさつとやっちゃってほしいですよね。

北見 でもあんまり早いのもねえ・・生焼けじゃ困りますから。

野々村 あんまり・・

北見 は？

野々村 さつきから気になってたんですけど・・(北見の手を見る)

北見 何でしょう。

野々村 それ、きやはんですよ。

北見 きやはん？

野々村 足にするやつです。ほら。(立ち上がり、足を見せる)

北見 あー、そうか・・・どうりで・・・何か変だなとは思ってたんですよ。
（きやはんをはずし、足につけかえながら）いやー、初めてのことで
ですから、わからないことが多くて・・・（手伝ってくれる野々村
に）恐れ入ります。

野々村 （手伝ってやりながら）ウチは親戚連中がなんだかんだうるさいん
ですよ。しきたりとか手順とか、きっちりやらないと気が済まない
人達が多いんです。

北見 ウチはそういうこと言ってくれる人が誰もいないもんですから・
裾は折り返して下さい。

北見 はあ・・・

野々村 泥除けです。

北見 泥除け？

野々村 三途の川の渡し船まで、道が悪いですから。

北見 勉強になります。（野々村の首から下がっている頭陀袋を見て）あ
の・・・それ何ですか？

野々村 ああ・・・頭陀袋です。

北見 頭陀袋？

野々村 首からこうやってかけるんでしょ。六文銭っていう三途の川の渡し
賃が入ってて・・・

北見 ない。

野々村 え？

北見 参ったなあ・・・私、それないです。どうしよう。忘れ物しちゃいま
した。

野々村 大丈夫ですよ。こんなのただの形式ですから。宗派によっては浴衣
でもいいってところもあるそうですし。

北見 でも、その、六文銭ですか、渡し賃ないと、三途の川渡れないんで
しょ。

野々村 そんなの迷信ですよ。

北見 ・・すみません、三文貸してくれませんか？

野々村 ・・いやですよ。

北見 いいじゃないですか、迷信なんですよ。

野々村 私、迷信信じてますから。

北見 ずるいなあ。じゃあ二文、いや一文でもいいです。

野々村 だから駄目ですって・・・

北見
ケチ！
ケチ？

北見
いいじゃないですか、一文くらい。六文も持つてるんだから。
あのね・・・じゃあこの際、もう一つ言わせて頂きますけど・・・

北見
何でしょう。私まだ何か忘れ物してます？

野々村
その髭。

北見
え？ 髭？・・・髭、駄目なんですか？

野々村
駄目っていうか・・・私は好きじゃない。

北見
いや、好きじゃないって言われても・・・

野々村
ウチの高校では、皆びしつと五厘刈りでしたから。

北見
五厘刈り？

野々村
頭です。五分よりももつと短い五厘刈り。実は私、嶺南高校の野球

部で監督をやっております・・・

北見
そうですね・・・

野々村
挨拶や礼儀などの精神教育についてはかなり厳しい男だという評判
を頂いております。

北見
はあ・・・

野々村
人には、時と場所にふさわしい服装や身だしなみというものがあ
ります。学校へ来る時、学生は学生らしく制服を着る。野球がやりた
ければ、高校生は高校生らしく坊主頭にする。そして死者は死者ら
しく、旅立ちの時には髭くらい剃った方が・・・

北見
ちよつと待って下さい・・・

野々村
何でしょう。

北見
その論理、めっちゃめっちゃ強引です。

野々村
そうですね。

北見
この髭はですね・・・私にとって、とても大切なものなんです。そり
や確かにあなたから見れば死者らしくないかもしれませんが。しかし
この髭は、私のトレードマークと申しましょうか・・・この髭がなく
なったら、個性といってしまうようか、アイデンティティといいましょ
うか、せつかくの私らしさがなくなります。髭のない私なんて、そ
れは私じゃない。

野々村
バンドやってるロン毛のワルガキが、服装検査の時に同じような言
い訳をします。

北見 どうして日本の教育ってのは個性をそぎ落とす方向にしかいかないのかなあ・・いいですか。この髭は、私が二十六の時に伸ばし始め、三十五年間一度も剃ったことがないんです。三十五年ですよ。三十五年間、この髭は、私の顔面に存在し続けているのです。ということは、目や鼻や耳と同じように、顔のパーツの一部になっているんです。もし誰かが私の顔で福笑いを作ろうとしたならば、髭というパーツは欠かせないはずですよ。

アナウンスが入る。

(江沢)

野々村家のご遺族、ご親族の方々は第一炉前ホールに、また、北見家のご遺族、ご親族の方々は、第二炉前ホールにお集まり下さいませよう、お願い申し上げます。

野々村

申し訳ございません。余計なことを言いました。この身体の最後の時が近づいてるといふのに・・

北見

いえ、元はと言えば、私が忘れ物したりするからいけないんです。

野々村

これ、どうぞ。(といって六文銭のうち三文を差し出す)

北見

え？

野々村

どうぞ、使ってください。

北見

いや、いいですよ、そんな・・

野々村

本当に、どうぞ。もし三途の川、半分しか渡れなかったら、後は二人で泳いでいきましょう。

北見

どうもありがとうございます。助かります。

野々村

その替わり・・

北見

何でしょう。

野々村

・・煙草・・一本頂けますか。

北見

いいですよ。

野々村

やめてたんですよ、煙草。もう五年になります。最後にどうしても、一本だけ吸いたくて・・

北見

私はヘビースモーカーだったもんで・・娘が持たせてくれたんですよ。どうぞ。

北見、煙草を差し出し、火をつけてやる。

野々村 ありがとうございます。

野々村、おいしそうに一服吸う。

野々村 あー・・うまい。クラツときますね。

北見 じゃ、私も。

北見も新しい煙草に火をつける。

野々村 野々村浩介といいます。

北見 北見栄治です。

野々村 長旅になるかもしれないませんが、どうぞ宜しくお願い致します。

北見 こちらこそ。

野々村 ・・きれいですね・・桜。

北見 あるといいですなあ・・三途の川の川べりにも。こんなきれいな桜

並木が・・

二人、桜を見ながら煙草を吸っている。

溶暗。

読経が聞こえてくる。

炉前ホール。

暗闇に、斎場の管理人江沢の姿が浮かび上がる。

江沢

ご遺族の方、最後のお別れをお願い致します。

別な場所に、野々村家の人々の姿が浮かび上がる。礼子、早紀、桂、泉、正和の順番で棺の前に立ち、焼香をする。

また別の場所では、北見家の姿が浮かび上がる。幸恵は焼香をすませた後、牧に焼香を勧めるが、牧は断る。しかし再び勧められ、戸惑いながらも焼香をする。

江沢

喪主の方、ボタンをお押し願います。

野々村家は礼子、北見家は幸恵が進み出て、ボタンを押す。遺族達のすすり泣く声が大きくなる。

棺は炉の中に入っていく。

炉の音に泣き声はかき消されていく。

待合室。午前十一時三十分頃。

早紀の肩を抱いて、泉が現れる。

泉は早紀をソファに座らせる。

泉 早紀ちゃん、大丈夫？ 和室の方でちよつと横になつてる？
早紀 大丈夫。平気、ここで。

早紀、ソファにもたれ、目を閉じている。

正和が現れる。

正和 皆、向こうの待合室にいるから・・妙子おばちゃんとか、吉田のお
じいちゃんとか・・向こう、ほら、テレビとかあるし・・
そう・・

正和 しかし齋場もケチだよな。お茶っ葉くらい用意しといてくれもいい
じゃんなあ・・レンジ台の下にあつたやつ持ってきたから。ほ
ら、新庄さんから頂いたやつ。あれでいいよな。

泉 いいんじゃない。

正和 よかった。

泉 何が。

正和 駄目だつて言われたらどうしようかと思ってちやつた。

泉 だって、もう持つて来ちやつてるんでしょ。今さら駄目だつて言っ
たつてしょうがないじゃない。

正和 え？じゃあ本当は駄目なの？心の中じゃ駄目だと思ってるけど、も
う持つてきちやつたからしょうがないってこと？実は俺の知らない
場所にもつといいお茶っ葉があつたつてこと？どこ、それ、どこ？
うるさいわねえ。ごちやごちや言つてないで、早く親戚連中にお茶
出して来なさいよ。

正和 あ、それはもう礼子さんがやつてくれる。

泉 そう・・じゃあ、あんたは、お寺さんにお茶・・

正和 それも礼子さんが・・

泉 じゃあ管理人さんにお茶・

正和 それも礼子・

泉 どうして礼子さんばかりにやらせるのよ。礼子さん、夕べだつて一睡もしてないんだから。こういう時くらい休ませてあげなさいよ。

正和 だって俺がやろうって思った瞬間に、もう礼子さん、湯呑み乗せた

お盆持って回ってるんだもの。まったく、あの人、すばやいんだよな・

泉 あんたがグズなのよ。

正和 そんなこと言うんだつたら、おまえ行けよ。

泉 いやよ、私は。

正和 なんて。

泉 だって向こう、小松のジジイいるんでしょ。

正和 (隣の待合室を気にして) おい・

泉 顔見るのもヤだもん、あのジジイ。

正和 まったく・

泉 おばあちゃんは？

正和 和室で横になつてる。

泉 誰かついてなくて平気？

正和 礼子さんが・

泉 いい加減にしなさいよ。何人いるのよ、礼子さん。いっぺんにそんないろいろできるわけないでしょ。

正和 だって、礼子さん、神出鬼没なんだもん。

礼子登場。

正和 うあー、びっくりした。

泉 礼子さん・

礼子 泉さん、正和さん、お疲れ様でした。今、お茶いれますから、ゆっくりして下さい。早紀、あんたもお茶飲む？

早紀 (無言で首を振る)

礼子、泉達にお茶を入れてやる。

泉 礼子さんこそ、ちよつと一休みして。
礼子 ええ。でももうすぐお弁当だから・・

泉 大丈夫よ。お弁当くらいウチのにやらせるから。
正和 俺、やります。

礼子 でも・・

泉 いいのよ。この人、普段パチンコばかりやってフラフラ遊んでるんだから、こういう時にでも働いてもらわないと。だから、ね、礼子さん、お願い。休んで。

正和 お願いします。

礼子 ・・じゃあ、ちよつとだけ・・

礼子、座る。

泉 どうもご苦労様です。

正和、礼子にお茶を入れてやる。

礼子 こちらこそ、いろいろとありがとうございます。泉さんや正和さんがいて下さって、本当助かります。

泉 何言ってるの・・浩ちゃんの従姉妹として、できるだけのことはさせてもらいますよ。
礼子 ありがとうございます。

窓の外を、幸恵が通りすぎる。

礼子、お茶をすする。

礼子 お茶、おいしい。

正和 でしょ。静岡に高校の先輩がいましたね。毎年お歳暮に送ってくれるんですよ。

礼子 どうりで・・香りが違いますもん。

早紀、突然身体を起こし、お茶の香りをかぐ。

早紀 ほんとだ。

といて、またソファにもたれかかり、目を閉じる。
窓の外を、牧が通りすぎる。

正和 よかった。やっぱこれで正解だった。

三人、お茶をすする。

泉 亮ちゃん、間に合わなかったねえ。

礼子 今朝も早紀に電話してもらったんですけど・

泉 どうしたんだらうねえ。

正和 正月は？ 帰ってこなかったの？

礼子 おととしのお盆に帰ってきてから、一度も・

泉 本当はこの春、大学卒業だったんでしょ？

礼子 ええ。

泉 就職、どうするつもりなんだろう。

礼子 そんな話も全然してないんですよ。

正和 しょうがねえなあ・亮太もしっかりしないと・

泉 あんたがそれ言うか。

早紀、いきなり立ち上がる。

礼子 何？

早紀、部屋を出て行こうとする。

礼子 どこ行くの、早紀？

早紀 どっこも行かない。

早紀、部屋を出て行く。

泉 おばあちゃんは？

礼子 大丈夫。眠っちゃったみたいですよ

正和 このままずっと眠ってくればいいんだけどね。

泉 やめてよ、縁起でもない。

正和 馬鹿。今日、ここでの話だよ。

泉 最近、かなりキテるんだって？ おばあちゃん。

礼子 ええ・・・

正和 ご飯食べたの覚えてないとか。

礼子 そういふのは大したことないんですけど、外、一人で出歩いたりさ

れると、やっぱりねえ・・・

正和 それは危ないなあ・・・

泉 まだ七十なのにねえ。

正和 ぶつぶつ独り言言ったりする？

礼子 時々。

泉 誰と話してるんだらう。

正和 幻覚見てるのかなあ。

泉 幽霊だったりして。

幸恵が入ってきて、別のソファに座る。

礼子と幸恵、目が合い、会釈する。

泉 (小声で礼子に) 誰？

礼子 今日、もう一組あったんですよ。たまたま、同じ時間になって・・・

泉 知ってる人？

礼子 (首を横に振る)

牧が入ってくる。

牧は部屋の中を見渡し、湯呑みを探す。

正和 (牧の顔を見て) あ・・・

泉 何？

正和 (気まずそうに牧から目をそらす) いや・・・

牧、湯呑みを探しに給湯室へ行く。

泉 あのさ、礼子さん。こんな時にあれなんだけど・・・

礼子 何ですか？

泉 浩ちゃんってさ、生真面目で几帳面で、何事もきっちりしてないと

気が済まない人じゃない。

礼子 ええ・・・

泉 私はさ、そんな浩ちゃんのお葬式だからこそ、私達が力を合わせてきつちりやっつてあげたいと思うわけさ。

礼子 はい・・・

泉 ところが、そんな私達親戚一同の気持ちを踏みにじるようなことを平気でする輩がいるってこと、ご存知？

礼子 は？

泉 小松のジジイよ。

正和 おい、やめろよ。

泉 そりゃいろいろやってくれるのはありがたいわよ。でもあの人ののは、自己顕示欲っていうの？押しつけがましっていうの？自分はこのだけやっつてるぞってことを見せつけようとしてる？そんな臭いがプンプンなのよ。

礼子 でも小松さんには野球部の後援会長やって頂いたり、いろいろお世話になってるから・・・

泉 だからって彼の態度デカすぎない？お通夜の時なんか、一人でしきつちやっつて・・・まあ、あがれあがれ、顔見てやってくれって、どんだん勝手に案内しちゃってさ。

礼子 お客さん、教え子とか野球部の関係者が多かったし・・・

泉 おい、礼子さん、お茶出してーなんて・・・自分を何様だと思ってるんだっつーの。

礼子 選挙の時、私、事務所働いてたから・・・

泉 お寿司の出前とか、精進落としての料理屋とか、皆あの人の関係のところじゃない。何でもかんでも自分で決めちゃおうとするんだから・・・

礼子 おかげでこっちも助かってるのよ。

早紀が窓の外を通りすぎる。

泉 今一つ判然としないのよね。ただの目立ちたがり屋さんなのか、それとも市会議員の選挙をにらんだ計画的犯行なのか。

正和 犯行って・・・

早紀、戻ってくる。

泉

一番腹立ったのは出棺の時よ。釘打ちはさ、血のつながりの濃い順に、遺族、親族、知人って順番じゃない。小松のジジイ、何番目だったと思う？四番目よ、四番目！妻の礼子さん、娘の早紀ちゃん、おばあちゃんときたら、次は従姉妹の私でしょうに。浩ちゃん兄弟いないんだからさ、それを厚かましくもしゃしゃり出てきやがって・・・

正和

声が大きいよ。

泉

しかも力の加減つてもを知らないんだから。あんなの普通くぎの頭んとこ軽くコンコンってやるじゃない。それをあの人、思いつきり打ち込んだもんだからさ、釘斜めに入っちゃって蓋割っちゃってんの。何すんだジジイ！

と、泉、わざと隣の待合室の方を向く。

正和

やめろってば、おい・・・

牧が戻ってくる。

手には缶のお茶を二つ持っている。

牧

どうぞ。

幸恵

え？

牧 湯呑み探したんですけど、全部使ってるみたいだったんで・・・冷たいのしかなかったんですけど・・・

幸恵 すいません。

幸恵、小銭を出そうとする。

牧

いいです、いいです。

幸恵

いえ、そういうわけには・・・

牧、隣のソファに座っている正和に気がつく。

牧 あ・
正和 どうも・

牧 どうしたんですか、こんなところで・
泉 誰？

正和 俺がたまーに行くレンタルビデオ屋の店長さん。

牧 エキサイティングビデオの牧と申します。

泉 ああ・北口の・

牧 原田さんには、いつもお世話になってます。
泉 ん？

正和 (話題をそらそうとして) でもなんで店長、こんなところに・
牧 り身だし親戚だつてこの辺にはいわないつて言つてたじゃない。
ええ・

正和 あれ？もしかして・ご家族になられる予定の方？(と幸恵の方を
見る)

牧 違いますよ、そんな・

幸恵 違います。

牧 こちら、乾幸恵さん。今日こちらをご利用になってらっしゃる・

正和 ご利用つて・

牧 北見栄治さんの娘さんです。

幸恵 乾と申します。

礼子 この度はご愁傷様でございました。野々村礼子と申します。

泉 原田泉と申します。

正和 原田正和と申します。

礼子 よろしかつたら、お茶、どうぞ。

幸恵 いえ、今、買つてきて頂いたんで・

泉 だつて、それ冷たいんでしょ。温かいのどうぞ。

幸恵 ええ、でも・

牧、やや不機嫌である。

正和 このお茶、おいしいんですよ。静岡に大学の同級生がいましたね。
毎年お中元に送ってくれるんです。あ、そろそろ弁当の時間だ。

礼子 じゃあ、私・

正和 いいつて、いいつて、俺やるから。礼子さんは座つてて。店長も、

礼子 お茶飲んでゆつくりしてつてよ。
正和さん・・

正和、隣の待合室の方へ行く。

泉 どうぞ。

幸恵 すいません。

牧 僕は結構です。

礼子 何かと大変だったでしょ。

幸恵 ええ・・

礼子 ウチはお通夜から告別式まで全部自宅でやったもんですから、

ね・・

泉 いろんな人があーでもないこーでもないって、うるさい、うるさい。

礼子 告別式はどちらで？

幸恵 東山の集会所で・・

礼子 そうですか・・

正和、窓の外を通りすぎる。

幸恵 父は一人でマンションに住んでいたんですが、エレベーターに棺が入らなくて・・

泉 へえ・・最近じゃそんなこともあるんですね・・

幸恵 突然のことで、私もよくわからないことが多くて・・葬儀社の方にほとんどおまかせしちゃったんです。

礼子 突然・・お倒れになったんですか？

幸恵 え？

泉 脳溢血か何か？

幸恵 ええ・・まあ・・

幸恵の鞆の中で、携帯電話が鳴る。

幸恵 すみません。

幸恵、席をはずし、電話に出る。

幸恵 もしもし。あ、レイちゃん？ 私・・

幸恵、窓際の方へ言って小声で話す。

礼子 関係者の方、ずいぶん少ないんですね。

牧 そうなんですよ。僕もそれほど親しいわけじゃなかったんですが、顔見知りのお客様ですし、告別式に行っただけですよ。そしたらほとんど参加者がいなくて・・

泉 そう・・

牧 仕方ないから、ここまでついて来たんです。

礼子 北見さんって？

牧 三年くらい前にこちらに越してこられたそうなんです。

泉 お仕事は？

牧 さあ・・会員証作ってもらった時は、自営ってことになってたと思いますけど・・

電話を終え、幸恵が戻ってくる。

幸恵 (財布を出しながら、牧に) あの・・さっきの・・

牧 え？・・ああ・・いいですよ。飲んでらっしゃらないみたいだし・・

幸恵 そうじゃなくて・・あ、でも、それはそれで・・ごめんなさい、十円ないので、後で・・

幸恵、百円を牧に渡す。

牧 そうですか・・じゃあ・・

幸恵 ほら・・さっきおっしゃってたじゃないですか。父がお借りしたまま返却してないビデオがあるって・・

牧 ああ・・でもそれは・・

幸恵 延滞料、おいくらですか？

牧 いいですよ、そんな・・

幸恵 そうはいきません。亡くなった後までだらしないって言われるのは、父にとつて本意じゃないでしょうし、私も嫌ですから。

牧 そうですか？

幸恵 正確におっしゃって下さい。おいくらですか？

牧 それが・・

幸恵 はい。(と財布からお金を出そうとしている)

牧 十九万五千五百円。

幸恵 え？

牧 七百八十二日。二年と一ヶ月と二十二日です。

幸恵 そんなに・・

泉 あんた、その間、何も言わなかったの？

牧 ええ。あれはもう、北見さんに差し上げたようなものだと思ってましたから・・

泉 その割には延滞日数ちゃんと覚えてるじゃない。

牧 お借りになったのが、ちょうどウチの店のオープン一周年記念日だったもんですから。昨日一応と思って計算してみたんです。

幸恵 十九万・・

牧 五千五百円。

幸恵 五千五百二十円。

牧 ああ・・

そこに江沢が現れる。

江沢 野々村さん・・

礼子 はい。

江沢 二万二千五百円。

礼子 は？

江沢 お弁当、届いてますよ。

礼子、泉、不思議そうに顔を見合わせる。

江沢 だからさ・・お金。払ってあげて。二万二千五百円。お弁当屋さん、向こうで待ってるから。

礼子 ・・わかりました、すぐに行きます。

礼子、和室に財布を取りに行く。

泉 あれ？ ウチの人、いませんでした？

江沢、壁の時刻表のセロテープが剥げていることに気が付く。

江沢 いや、いなかったけど・・

泉 おかしいなあ。お弁当取りに行くってそっち行ったはずなんですけどねえ。

江沢、去る。

礼子、財布を持って出てくる。

礼子 じゃあ、向こうで、お昼にしましょうか。

泉 向こうで？

礼子 ほら、もうすぐ野球始まるでしょ。皆でテレビ見ながら、応援しましょうよ。

泉 また小松のジジイの顔見るのか・・

礼子、泉、隣の待合室の方へ行く。

幸恵 どうしましょう・・さっきの・・

牧 いいですよ、その話は、本当に。

幸恵 でも・・

牧 それより、どうします、お昼？

幸恵 私はまだ・・

牧 そうですか。じゃあ僕は、そこらへんで何か食べて来ようかなあ。

幸恵 あの・・

牧 はい。

幸恵 ここらへんってTBS映ります？

牧 ああ・・8で映りますよ。

幸恵 8？

牧 ええ。1がフジテレビ系、4がNHK、6が日テレ系、8がTBS

幸恵
牧

系・・・田舎だから。
どうもすいません。いろいろとありがとうございます。
じゃあ、また・・・後ほど。

幸恵、時計を気にしつつ、隣の待合室へ行く。

牧、缶のお茶を飲み干す。

そこに早紀が現れる。

牧と目が合う。

牧

あ。

早紀、逃げるように部屋を出て行く。

牧

ちよつと、待ってよ。ねえ・・・

牧、追いかけて去る。

誰もいなくなつたところへ、正和、三十個の弁当を入れた袋
を両手に提げ、現れる。

正和

お待たせしました。いやー、三十個一人で持つのは結構大変・・・あれ？皆・・・どこ行っちゃつたの？おい、泉！礼子さーん！

正和、袋を持って隣の待合室へ行く。

焼けこげた白装束を着た野々村と北見が走り込んでくる。

二人 あちちち・・

北見 いやー、参った参った。熱いよ。こりや、サウナなんてもんじやないなあ・・

野々村 だから言ったじゃないですか。サウナとは全然違うって。

北見 それにしたって、ちよつと火強くありませんか？もつと弱火でお願いしたいなあ。

野々村 とりあえず、ちよつと休憩しましょう。

北見 そうですね、休憩、休憩と。

北見、袖から煙草を取り出す。

北見 あ・・半分焦げてる。皆シケモクみたいになっちゃって・・あー

野々村 あ・・いいですか？

野々村 いいです、いいです。

北見と野々村、シケモクに火をつけ、うまそうに吸う。

北見 なんだか浮浪者みたいですね。

野々村 そんなにまでして吸いたいかって感じですね。

北見 しかし、いいですなあ、おたくは。にぎやかそうで。

野々村 そんなことありません。うるさいだけですよ。

北見 親戚の方だけでも三十人くらいはいらっしやるでしょ。

野々村 皆県内に住んでますからね。冠婚葬祭だっていうと、どつと集まるわけです。北見さんは、ご出身はどちらなんですか？

北見 私は東京です。三年程前に、こっちに引っ越して来ました。

野々村 そうですか。

北見 娘が嫁に行ったもんで、家内と二人、全く見ず知らずの田舎でのんびり暮らしてみようってことで、ここへ。

野々村 何にもないところでしょ。

北見 ところが、こっちへ来てすぐ、家内が亡くなりまして。

野々村 え？

北見 前から胸が悪かったもんですから、その療養の意味もあつて来たんです。が、意外とあつけなく、

野々村 ・・・そうですか、

そこに桂が現れる。

部屋の中をウロウロ歩き回っている。

野々村 あ、おふくろ、

北見 ほう、お母様、ご健在ですか。

野々村 まだ七十一なんですけど、かなりボケちまってる、
北見 そうですか。

野々村 ごめんな、おふくろ、俺の方が先にいつちまってる、まさかこんなことになるとは思ってもみなかったよ、なんて、聞こえないのはわかってるけど、俺、どうしても言いたかったんだ。おふくろ、長い間、本当にありがとう。長生きしてくれよ。

桂 何言ってるんだい。

野々村 え？

桂 あたしやまだまだ死なないよ。

野々村 ・・・おふくろ、

桂 それに、どうしたんだい、その格好は。戦時中じゃあるまいし。なんでそんな焼けこげた浴衣着てんだ。

野々村 どうして、ねえ、おふくろ、俺の姿、見えるの？

桂 あんたね、馬鹿にしちやいけないよ。そりやあたしももう七十だからさ、新聞の字や何かは眼鏡かけなきゃ駄目だけどさ。あんたの姿くらいはつきり見えるさ。

野々村 北見さん、どういうことでしょう、

北見 いやー、見えるっておっしゃってるんだから、見えるんでしょうなあ。会話も成立してますし。

野々村 あのさ、おふくろ、実は、俺、死んじゃったんだよ。

桂 あ、そう。

野々村 あ、そうって、

桂 どうりでかげが薄いと思ったよ。
野々村 え？
桂 だって身体透けて見えるもん。
野々村 本当？
桂 いつ？
野々村 え？
桂 いつ死んだの？
野々村 おとといの夜。
桂 なんで。
野々村 クモ膜下出血。
桂 なんだ。そうだったの。礼子さんったら、私に何にも言わないんだから。
野々村 いや、言ってるよ。それにおふくろ、お通夜も葬式も出てたじゃない。
桂 誰の葬式だかわかんなかったんだよ。そうか。おまえの葬式だったのか。なーんだ。
野々村 なーんだじゃないよ。なあ、おふくろ・悲しくないの？
桂 悲しいも悲しくないも・死んじゃったんだからしょうがないじゃない。
野々村 まあ、そうだけどさ・
桂 人間、いつかは死ぬんだ。いつまでも未練たらしい顔してんじやないよ。
野々村 ・・はい。
桂 そちらは？
野々村 えー！
野々村 こちら、北見さん。今日たまたま一緒になっちゃって。
北見 北見と申します。火葬仲間の。
桂 浩介がお世話になります。人生最後の友達、いや、あの世での最初の友達として、面倒見てやって下さい。
北見 こちらこそ宜しく願います。
桂 ・・北見さん。
北見 はい。
桂 あんたはなんで死んじゃったの？
北見 は？

桂 火葬場に、ご親戚の方、誰もいらしてないじゃない。もしかして、何か訳アリ？

北見 はあ・・・ま・・・何ていうか・・・

桂 何、何？教えて。

野々村 やめろよ。北見さんには北見さんの事情がおりになるんだから。

桂 まさか女の腹の上で死んだとか？

野々村 おい・・・

桂 それが愛人の部屋だったとか？

野々村 やめろってば。何、失礼な事言っただ・・・北見さん、すみませ
ん。

北見 彼女と初めて会ったのは、一年前・・・

野々村 えー！

北見 桜のつぼみもふくらみかけたばかりの季節・・・

野々村 何語り始めてんですか！

北見 それは私が六十、彼女が二十八の春のこと。

野々村 何だ、それ・・・いくつ違うんですか？

北見 三十二。

野々村 犯罪だ！

桂 面白そう。聞かせて、聞かせて。

北見 初めは人生の先輩として、彼女の悩みを聞いてあげるだけの良き。パ
パだった私が・・・

そこに江沢が入ってくる。

電車の時刻表をきれいに貼り直すため、セロテープを持って
いる。

もちろん江沢には、野々村と北見の姿は見えない。が、北見

は江沢のことを気にして話すのをやめる。

江沢、作業しながら、桂に話しかける。

江沢 本当に残念だったねえ、おばあちゃん。寂しくなるけど、気を落と

桂 さないでね・・・浩介さんには、私の甥っ子がお世話になってさ・・・

うるさいなあ！いいところなんだから黙ってなさいよ！

江沢 ・・・・

野々村 なんてこと言うんだ。あの人は、俺達の姿が見えないんだぞ。

桂 いいんだよ、いちいち気にすんなって。

一人でペラペラしゃべっている桂を見て、江沢は唾然とする。

野々村

でもさ・・・

桂

浩介！あなたは黙ってなさい！

江沢

・・・浩介？

桂

ほら、早く。話聞かせてよ、北見さん。

江沢

・・・北見さん？

江沢、背中に寒いものを感じる。

江沢

じゃあね、おばあちゃん・・・またね・・・

江沢、そそくさと作業を終え、逃げるように去る。

野々村

あーあ。江沢さん、完全におふくろがボケてると思ってるよ。

桂

そんなことより、話の続き・・・

北見

ええ・・・

野々村

(通路の方を見て)あ・・・皆、戻って来るよ。話の続きは、また後

でということにしよう。

北見 そうですね。

桂 え？つまんない。どうして？

野々村

だってこのまま俺達と話をしたら、ブツブツ独り言言ってるようにしか見えないだろ。皆に余計な心配かけないでくれ。な。

桂 しようがないわねえ・・・そのかわり、後でちゃんと話聞かせてよ。

北見 わかりました。

野々村

じゃあ、俺達、ちょっと隠れてるからさ。

野々村と北見、ソファの後ろに姿を隠す。

桂、お茶を飲む。

泉、正和、礼子が戻ってくる。

泉 全く・・あんたって人はドジなんだから・
正和 だって、お弁当、お願いって言われたからさ・・俺はてっきり買

に行かなきゃいけないのかって思ってたさ・・注文済んでて受け取る
だけだったたら、そう言っといてくれよ。

正和、弁当の入った袋を両手に持っている。

礼子 (桂に気がつき) おかあさん。

泉 あら、おばあちゃん、起きてたの？

桂 起きてちゃ悪いかい？

礼子 お腹空いたでしょ。お弁当食べる？

桂 あのね。私がお飯食べたのすぐ忘れると思ってるでしょ。人をボケ

老人扱いしないで。さっきちゃんと頂きましたよ。

泉 いやいや、おばあちゃん、まだ食べてないって。

桂 その手にやのりませんからね。

泉 その手にやって・・お願い。お弁当、食べて。山程余ってるのよ。

正和 あと二十七個あります。

泉 あれ、三十個じゃないの？

正和 俺が三個食った。

桂 わかりましたよ。食べてあげますよ。

正和 助かります。よし、これであと二十六個。

桂、弁当を食べ始める。

野々村と北見、ソファの後ろから顔を出す。

野々村、北見に家族を紹介する。

野々村 妻の礼子です。それから従姉妹の泉。美容院やっています。そしてダ

ンナの正和。いつもドジ踏んで怒られてばかりですけど。

玄関に通じる入り口の方から、早紀が入ってくる。

礼子 早紀・・あんたどこ行ってたのよ。

野々村 娘の早紀です。

早紀 お腹空いた。

礼子 早くお弁当食べなさい。
正和 はい、どうぞ。早紀ちゃん。（弁当を渡す）
早紀 ・・・どうも・・・
正和 よし、あと二十五個。

幸恵が入ってくる。

北見 幸恵です。娘の。
野々村 なんだ・・・愛人の方かと思つてドキドキしましたよ。

北見 またまた・・
泉 ちよつと乾さん・・

幸恵 はい。
正和 おい、泉、やめろよ。

泉 あんたは黙つてて。
幸恵 何か？

泉 さっきの・・ちよつと失礼じゃありません？
幸恵 さっきのつて・・

泉 テレビですよ。皆がテレビ見てるのに、どうして勝手にチャンネル
変えちゃうんですか？

幸恵 ごめんなさい。どうしても見なきゃいけない番組があつたもん
で・・それに、皆さん、お弁当食べてらしたから、そんなにちゃん
と見てる方いらつしやらないかなつて思つて・・

泉 そんなことありませんよ。皆ちゃんと見てましたよ。だつて甲子園
ですよ。一回戦の第二試合。地元の嶺南高校が出てるんです。去年
まで浩ちゃんが監督やつた高校が初めて甲子園に出たんですよ。
ちゃんと見ないはずないじゃないですか。なのに、あんなくだらな
いバラエティ番組にチャンネル変えて・・
幸恵 ちよつと待つて下さい・・あなた方から見ればくだらない番組かも
しれませんが、私にとっては、とても大事な番組だったんです。
私、東京でタレントプロダクションを経営してまして・・

早紀、弁当を食べる手を止め、幸恵をじつと見ている。

幸恵 今日ウチのタレントの初仕事だったんです。五分程の生中継でレス

トランを紹介するレポーターの仕事です。そりゃ大したコーナーじゃないかもしれませんが、彼女にとっては、かけがえのない初めての仕事だったんです。

泉 そんな個人的な事言われてもねえ・

幸恵 個人的な事？

泉 そんな事言い始めたら他の人だって皆いろいろ見たい番組あるだろうし、言いたい事もあると思うわよ。でもそういう個人的なあれはおさえて、全体のことを優先させてるんじゃない。

幸恵、バッグから煙草を取り出し、吸い始める。

幸恵 全体のことって・・ここは火葬場ですよ。公共の施設ですよ。今日

ここを使ってるのはあなた方だけじゃないんです。今、ここにいる人間には、この施設の中の備品を使う権利が平等にあるんじゃないんですか？

北見 馬鹿、幸恵・すみません、なんだか・

野々村 いえ・

幸恵 さっきだってそうです。牧さんが湯呑みを探して下さってたんですが、皆さんが使われていたもんですから、私達の分がなかったんです。それで牧さんは仕方なく缶のお茶を・

泉 しょうがないじゃない。こっちは人数多いんだもん。これだから都会の女は嫌われるのよ。自分の権利ばかり主張したがってさ・そうやって少数派の意見に耳を貸そうとしないのが、田舎のよくないところだと思います。

幸恵、やめなさい。

桂 いやー、立派！

礼子 おばあちゃん・

桂 他人が何と言おうと、自分の考えはビシッと主張する。なかなかで

幸恵 きないよ。さすがあの親にしてこの子ありだ。

桂 あん・父をご存知なんですか？

幸恵 はい。とても素敵な方ですね。

桂 ・・ありがとうございます。

幸恵 ずいぶんおモテになったでしょ。

さあ・

桂 お髭も魅力的だし。

幸恵 はあ・・

桂 男冥利に尽きる最後を遂げられたと思います。

幸恵 は？

桂 三十二歳年下の愛人の腹の上で死ぬなんて。

礼子 おばあちゃん！

野々村 馬鹿！

礼子 すみません・・ウチのおばあちゃん、時々わけのわかんないこと口走ったりしますんで。

幸恵 ・・どうしてご存知なんですか？

正和 え！

泉 本当なの？

幸恵 父の死因は、私とあの人以外は誰も知らないはずです。なのにどうして・・まさか病院関係から・・

桂 さつき北見さんに聞いたのよ。

幸恵 北見さんって・・

桂 ほら、そこに・・

北見、野々村、ソファの後ろにあわてて身を隠す。

桂 おかしいなあ。今までそこにいたのに。浩介と二人で。

泉 浩ちゃんど？

礼子 ねえ、おばあちゃん。いろいろ大変だったからさ、疲れたまってるのよ。ちよつと向こうで休んでみましょうか。もしかしたら、浩介さんと北見さん、向こうのお座敷の方へ行っただのかもしれないよ。そう？じゃあ・・しょうがない・・行ってみるかねえ。

礼子 (幸恵に) どうもすみませんでした。

礼子、桂を連れて去る。

幸恵 私、ちよつと出てきます。近くに、何か食べる場所ありますよね？

泉 何もないよ、田舎だから。

正和 よかったら、お弁当どうぞ。

早紀 国道まっすぐ行って、歩道橋の手前右に曲がって百メートルくらい行ったところにコンビニありますよ。
幸恵 ありがとう。

幸恵、去る。

泉 ったく・・なんなんだろうね、あの女は・・
正和 おまえもやめとけよ、些細な事でいちいちつかかるの。
泉 だって・・

泉、席を立つ。

正和 どこ行くんだよ。
泉 野球見てくる。
正和 じゃあ、俺も。

泉、正和、隣の待合室へ行く。

早紀 ごちそうさまでした。

早紀はお茶を入れる。
北見、野々村、再び顔を出す。

北見 なんだか面倒臭いことになっちゃって・・どうもすみませんでした。
野々村 いえ、幸恵さんのおっしゃる通りです。田舎ってところは閉鎖的ですからね、自分に近い人達のことしか考えない。客観的に見るとよくないなあと思いますよ。

テーブルの上には、置き忘れた幸恵の煙草がある。
早紀、あたりに誰もいないことを確かめると、一本拝借し、吸い始める。

野々村 あ、早紀・・おまえ・・

北見 ご存じなかったんですか？

野々村 ・・うすうす感づいてはいたんです。ウチでも食事の後必ずトイレに行くので、胃腸が弱いにしては規則的すぎるなと思っていたんですが、現場を見るのは初めてなもので・・しかも人の煙草だろ、それ・・なんだか、すいません。親子そろってもらい煙草で。

北見 いえ・・ところで、どうします、これから？

野々村 あの・・私・・隣の待合室でテレビ見てきていいですか？ ウチの高校が甲子園出てるんですよ。私が監督辞めたとたんに強くなっちゃって・・

北見 蒔いた種が芽を出したんですよ。じゃあ、私は・・おばあちゃんと話でもして来ようかな・・

野々村 お願いします。

野々村と北見、別々の方向に去る。

早紀、一人で煙草を吸っている。

そこに牧が戻ってくる。

早紀、あわてて煙草を消す。

牧 駄目だよ。高校生が煙草吸っちゃ。

早紀、席を立とうとする。

牧 待ってよ。逃げなくたっていいじゃない。

早紀 別に、逃げてなんかかないです。

牧 さっきだって・・

早紀 さっきはびっくりしちゃっただけです。

牧 奇遇だねえ。まさかこんなところで会うとは・・

早紀 お久しぶりです。

牧 その節はどうも。

早紀 こちらこそ・・

牧 へえ・・(と早紀をジロジロ見る)

早紀 何ですか？

牧 長い丈のスカートも持ってたんだ。

早紀 本当はこの長さなんですよ。いつもウエストのところ折ってはい

牧 黒のストッキングだと感じ変わるねえ。
早紀 そうですか。
牧 大人っぽい。
早紀 大人ですから。
牧 あ、そう。
早紀 あれからユカリに会いました？
牧 会ってないよ。
早紀 電話番号聞いたんでしょ。
牧 聞いたけど、かけてない。
早紀 寂しがってましたよ。
牧 またまた・・
早紀 牧さんのスピッツまた聞きたいって。
牧 よく言うよ。
早紀 若者の歌なのに無理がないって。
牧 もう三十八だぜ。
早紀 その若さの秘訣教えて欲しいって。
牧 そうだなあ、まず・・

その時、帽子をかぶり、大きなリュックサックを背負い、真
っ黒に日焼けした男が現れた。亮太である。

早紀 お兄ちゃん・・
亮太 金。
早紀 え？
亮太 まだ、金、払ってないんだ、タクシー。
早紀 いくら？
亮太 二千五百六十円。
早紀 何よ、そんなお金も持ってないの？
亮太 表で待ってるから、払っといて。
早紀 何勝手なこと言ってるのよ。
亮太 オヤジは？
早紀 ・・・・
亮太 オヤジはどこだって聞いてんだよ！

早紀　・ ・ 遅いよ ・ ・ 遅いよ！
亮太　・ ・ もう焼いてんのか ・ ・
早紀　そうよ！今までどこで何やってたのよ！

礼子、出てくる。

礼子　亮ちゃん ・ ・

亮太、炉前ホールの方へ向って走り去る。

礼子　どこ行くの、亮ちゃん！

礼子、亮太の後を追う。

早紀　お兄ちゃん！（牧に）ごめんなさい。悪いんだけど、タクシー代、払っというて下さい。

早紀、後を追って去る。

牧　何で俺が？ ・ ・ しょうがねえなあ ・ ・

と、言いながら玄関の方へ行く。

北見と桂が現れる。

北見　二十六の時に、アメリカに渡りましてね。ラスベガスで商売始めたんですよ。日本人の女の子、多い時で百人くらい使ってたかなあ。百人も？すごいねえ。
桂　着物着せて下駄履かせて、カジノの客相手にタダでおしぼりを配って歩くんです。
桂　タダで？それじゃあ儲からないじゃない。

北見　よく考えて下さい。カジノです。しかもアメリカですよ。
桂　え？ わかんないなあ ・ ・
北見　日本にいるとピンと来ないかもしれませんが、向こうはチップという習慣があります。

桂 なるほど。チップね。

北見 皆、金銭感覚が麻痺してるから、気前がいいんですよ。しかも相手

は着物着た日本の女の子。

桂 さらに気前がよくなると。

北見 その通り。

桂 すごい。北見さん、あんた大した人だ。これじゃあ、三十二年下の

娘だまくらかすのなんざ、わけないね。

北見 いやいや・だましたわけじゃありませんよ。

桂 本当？ハリウッドの映画プロデューサーに知り合いがいるから紹介

してやるとか言ったんじゃないの？

北見 違いますよ。

桂 じゃあどうやってたらしこんだのよ。

北見 たらしこんだって・実は、私達・ネットの競馬サイトで知り合

ったんです。

桂 競馬サイト？

北見 で、何度かメールのやりとりしているうちに、一度会いましょうと

いうことになりましたね。日曜日になると、二人でよく競馬場へ行

きました。京都、府中、大井、新潟、郡山・いろいろな行ったな

あ。

桂 へー。

北見 カンの鋭い子でねえ。レースの日の朝、目が覚めたら、1―4とか

5―8とか数字がひらめくって言うんです。それが結構な確率で当

たるんですよ。一度百三十五倍っていう大穴当てたことがありますし

てねえ。二万円買ったから二百七十万。

桂 二百七十万・

北見 いやー、あの時は楽しかったなあ・そうだ・桂さん。

桂 はい。

北見 実は一つお願いがあるんですが・

桂 何でしょう。

牧が戻ってくる。

桂が誰かと喋っている様子に驚く。

牧 え？

北見 あっちでお話しします。

北見、桂の袖をひいて外へ行く。

牧、不思議そうな顔で桂を見ている。

正和が入ってくる。

正和 あれ？ウチの人達は？

牧 えーと、亮介さん？亮一さん？亮作さん？

正和 亮太。

牧 そう、その亮太さんがいらして・・・

正和 え？亮ちゃん帰ってきたの？それを早く行ってよ。おーい、泉！亮ちゃん帰ってきたってさ・・・

正和、隣の待合室へ行く。

入れ替わりに、江沢、礼子、亮太、早紀がやってくる。

礼子 本当にご迷惑をおかけしました。あの・・・壊れたりしたところ、ありませんか？

江沢 いえ、大丈夫です。

泉、正和が入ってくる。

少し遅れて野々村が入ってくる。

泉 亮ちゃん・・・

野々村 亮太・・・

泉 どうしたの？

早紀 着くなり、おやじはどこだって、いきなり走り出しちゃってさ・・・お釜の前で、開けろ！開けてくれ！ってお釜の扉ガンガン叩き出しちゃって・・・

江沢 お気持ちはわかりますが、ウチとしてもいかんともしがたいものですから・・・

亮太 ・・すみませんでした。

江沢 いいんですよ。

江沢、去る。

亮太 皆さん・・・心配かけて、ごめんなさい・・・(炉前ホールに向って)

オヤジ・・・ごめん・・・

野々村 バカヤロウ・・・皆に心配かけやがって・・・

亮太 もうちよつと早くわかってれば・・・ちきしょう・・・間に合わなかつ

た・・・本当に、ごめん・・・

礼子 いいのよ。帰ってきてくれただけで、お父さんも満足してくれてる
と思うよ。

野々村 ・・亮太・・・よく帰ってきてくれたな・・・

礼子 そうだ。亮ちゃん、あなたお腹空いてるんじゃない？

正和 弁当あるぞ。弁当食え、弁当。

亮太 うん。

亮太、弁当を食べ始める。

早紀 ずっと、家、帰ってなかったんでしょ。何十回と電話したんだか

ら。何してたのよ・・・

泉 まさか彼女の部屋に入り浸ってたとか？

違うよ。

亮太 じゃあどこ行ってたのよ。

亮太、食べるのをやめてうつむく。

礼子 亮ちゃん・・・

正和 泣け。亮太。泣きたいだけ泣いていいぞ。男にはな、一生のうちで

泣いていい時が三回だけある。一つ目は・・・

亮太、顔をゆがめている。

礼子 どうしたの？

亮太 舌かんだ。

正和 なんだよ、しょうがないなあ。落ち着いて食えよ。

亮太、食べ始める。

亮太
インドネシア。

礼子
え？

亮太
インドネシアに花の写真撮りに行ってたんだ。今朝東京に帰ってきたばかりで・・

亮太、また食べるのをやめてうつむく。

亮太
また舌かんだ。

正和
おいおい、気をつける。かんだところから口内炎になったりするかな。チョコラBB飲んどいた方がいいぞ。

亮太、また食べ始める。

亮太
留守電聞いてすぐ飛び出してきちやったから、荷物、インドネシアに持っていったの、そのまんましょってきちやって・・

亮太、また食べるのをやめてうつむく。

正和
なんだ、またか・・しょうがないなあ。おい、亮太・・

泉
あんた・・
正和
ん？

泉、そつとしいてあげてというふうに見て合図する。

礼子
亮ちゃん、向こうに和室があるから、そつちで食べといで。

亮太
うん。

礼子
おばあちゃん、寝てるかもしれないから、静かにね。

亮太
わかった。

正和
亮太。もう一つ持ってけ。(と弁当を渡す)

亮太
ありがとう。

亮太、弁当を二つ持って和室へ行く。

泉 亮ちゃん・心配ないよ。

礼子 インドネシアだって・力抜けちゃったわよ。

牧 すいません。あの・タクシー代、いいですか？亮太さんの・

早紀 そうだ。ごめんなさい。(礼子に) 立て替えてもらってたのよ。

礼子 おいくらですか？

牧 二千五百六十円です。

礼子、牧に金を渡す。

泉 弁当、結構、役に立ってんじゃない。

正和 あと二十三個か・

牧 そうだ・野球、どうなってます？嶺南、今日やってるんでしょ。

泉 去年まで野々村さんが監督やってらしたんですよね。

正和 さっきまで見てただけだよ・

牧 五回裏終わって4―0で負けてる。

正和 なんだ・しょうがねえなあ・皆で応援しましょうよ。

早紀 そうだな。よし、行こう。

私、行ってこよ。

と、正和、泉、牧、早紀は隣の待合室へ行く。

礼子が一人、残される。

窓の外の桜をぼんやりと見ている。涙があふれてくる。野々

村、礼子に声をかけたいのだが、どうしていいかわからな

い。野々村、礼子の隣に座る。二人でぼんやりと桜を見てい

る。

和室から亮太が戻ってくる。

亮太 どうしたの？

礼子 ・・どうもしないわよ。

亮太 ごちそうさまでした。

礼子 もう食べちゃったの？

亮太、空の弁当箱をテーブルの上に置き、ソファに座る。

亮太 腹は減ってるんだけど、あんまり食欲なくて・

礼子 そう・

亮太 お母さん・

礼子 何？

亮太 実は・・俺さ・

礼子 やめて。

亮太 ・・・

礼子 いろいろ話したいことはあるだろうし、私も亮ちゃんに言いたいこ

とは山ほどあるわ。でも今は言わない。ね。だから亮ちゃんも、今

日はやめよう。

亮太 わかった。

礼子 今日はぼんやり、お父さんのことだけ考えていたいの。

亮太 うん。

早紀、隣の待合室から戻ってくる。

早紀 駄目だ。また一点とられちゃった・・どうしたの？

亮太 どうもしないよ。ね。

礼子 うん。

早紀 変なの。

早紀、ソファに座り、亮太の顔を見る。

早紀 変なの。

亮太 何だよ。

早紀 髭。

亮太 インドネシア行ってた間ずっと伸ばしてたからさ。おまえだって、

髪・

早紀 え？

亮太 色ぬいてんじゃん。

早紀 これ、高一からだもん。あれ、もしかして私が高校生になってから

初めて会う？

亮太 そう考えると、久しぶりだなあ。
礼子 ほんと久しぶりだよ。
亮太 いろいろとご心配おかけしまして、すみませんでした。
早紀 心配かけんなよな。大人なんだから。
亮太 うっせえ。
礼子 でもよかった。帰ってきてくれて。
亮太 ・・うん。
早紀 久しぶりだね・・久しぶりに・・皆そろったね。

野々村、いたたまれなくなり、背を向けて泣く。

亮太 オヤジ、どんな顔してた？
礼子 優しい顔してた。ね。
早紀 うん・・いつも怒ってばっかいたくせに・・ずるいよ。あんな顔しちゃって。

亮太、窓の外を眺める。

亮太 きれいだね・・桜。
礼子 うん・・きれいなね・・いい天気になってよかった。
早紀 ほんと。

皆で桜を眺めている。

亮太 金・
礼子 え？
亮太 金、いくらくらいかかんの？ 葬式全部で。
礼子 あんたがそんな心配しなくたっていいのよ。
亮太 でも一応知つといた方がいいかなって思つて・・長男だし・
礼子 何、それ。
早紀 タクシー代もなかったくせに。
亮太 銀行行く暇がなかったんだよ。
早紀 銀行行けばあるの？
亮太 あるよ。

早紀

いくら。

亮太

なんでおまえに教えなきゃなんねえんだよ。

早紀

どうせ千円以下なんだぜ。カードでおろせないんだぜ。

亮太

うるせえんだよ、おまえは。

礼子

ねえ・・・

早紀

何？

礼子

明日、みんなでどつかおいしいもん食べに行こうか。

亮太

いっすねえ。

早紀

いっすねえ・・・(窓の外を見て)・・・あ。

礼子

何？

早紀

煙。

亮太

え？

早紀

煙突から煙出てる。

野々村、背中を向けて煙草を吸っている。

保険会社の制服を着た女が現れる。
瀬能あずさである。

あずさ すいません・・

礼子 はい。

あずさ こちらに、野々村桂さん、いらつしやいますでしょうか。

礼子 ・・はい・・おばあちゃんに何か・・

あずさ 私・・瀬能あずさと申します。桂さんからお電話頂きました・・すぐこちらへ来てほしいということだったのですが・・何だろう・・少々お待ち下さい。

礼子、和室へ行こうとする。

亮太 おばあちゃん、いないよ。

礼子 え？

亮太 さっき、俺、入った時、いなかったよ。

早紀 見てくる。

早紀、和室へ行く。

野々村、北見と一緒にだと思い、外を見に行く。

礼子 失礼ですが・・どちらの瀬能さんでらつしやいますか？

あずさ 第一保険の瀬能です。

礼子 第一保険・・

亮太 なんで急に保険屋さんなんか・・

早紀、戻ってくる。

早紀 いない。

礼子 そう・・どこ行ったんだろう、おばあちゃん・・

早紀 やだあ・・フラフラ出てっちゃったんじゃないの？（亮太に）おば

あちやん、最近、ボケ入ってて危ないのよ。

礼子 すいません・・少々おかけになってお待ち下さい。今、探して参りますので。

亮太 俺も行く。

三人、出て行く。

あずさ、ぼんやり部屋の中を見渡している。

時計を見て立ち上がり、炉前ホールの方へ行こうとする。

そこへ野々村に連れられて、桂と北見がやってくる。

北見 ・・あずさ・・

桂 この方が・・

あずさ は？

桂 野々村桂でございます。

あずさ あ・・瀬能あずさです。

野々村 へー・・こんなに若くてきれいな人がねえ・・

桂 すいませんねえ、お仕事でお呼び立てして・・

野々村 （北見に）ちつきしよう！この犯罪者！

あずさ いえ・・ちようど昼休みですし・・

野々村 うらやましいなあ・・俺、今から人生やり直したくなっちゃったなあ。

桂 （浩介に）うるさいよ、あんたは！

あずさ は？

桂 いえ、何でもありません。

あずさ あの・・どういったご用件で・・

桂 息子が亡くなったものですから、急に不安が襲ってきましてね。保険について、すぐにでもお話を伺いたいと思ひまして。

あずさ それでしたら、営業の者から直接話をさせますが・・

桂 あ、そうだ。忘れてた・・ちよつとごめんなさい。

桂、北見にウィンクする。

北見もウィンクを返す。

桂、野々村の手を引っ張り、和室の方へ行こうとする。

野々村 何？

桂 いいからいらっしやい。

あずさ あの・・・野々村さん・・・

桂 すぐ戻って参りますので・・・あなたはここに座ってて。

あずさ、わけがわからないが、とりあえずソファに戻る。

北見、あずさの周りをウロウロした後、隣に座る。

北見 あずさ・・・ありがとう。よく来てくれたなあ。

あずさ、急に暑くなったような気がしてハンカチであおぎ始める。

北見 幸恵が何を言ったか知らないが、俺はおまえに、通夜も告別式もずっとそばにいて欲しかったんだ。

北見、あずさの肩を抱く。

あずさ、肩が重くなった気がして、肩を動かしたりする。

北見 だってそうじゃないか。おまえは俺の・・・

とそこに、礼子達、戻ってくる。

礼子 ごめんなさい、お待たせしちゃって。おばあちゃんどこにも見当たらず・・・

あずさ いらっしやいましたけど・・・

礼子 え？

あずさ さっきお会いしました。でも何か忘れてたとかおっしやって、あちらの方へ・・・
なんだよ、それ・・・

亮太、和室へ行く。

と、そこに幸恵が戻ってくる。

幸恵 ……どうして…
あずさ ……
幸恵 ……どうしてここにいるんですか？
あずさ いえ…あの…
幸恵 来ないって言ったじゃないですか。
あずさ すいません。
幸恵 今さら何ですか…やっぱり気が変わったなんて言わないで下さいね。
あずさ 違います。
幸恵 帰って。
あずさ ……
幸恵 帰って下さい。
あずさ すいませんでした…失礼します。

桂と亮太が現れる。
野々村もいる。

桂 待つて。
早紀 おばあちゃん。
桂 私がお呼びしたんです。
幸恵 どういうことですか？
桂 私がお電話して、いらしていただいたんです。
あずさ 保険の件でしたら、後日改めて…
桂 北見さんがね…
あずさ え？
桂 北見さんが呼んでくれて。あなたのこと。あなたに骨を拾ってほしい。そうおっしゃってるの。
幸恵 何バカなこと言ってるんですか…
礼子 すみません、ウチのおばあちゃん、時々、ちよつとその…何ていうか…
早紀 ボケ入ってますから…
礼子 早紀…
あずさ では…私は…

あずさ、去ろうとする。

北見 待ってくれ！

桂 待ってくれ！

北見 本当なんだ、あずさ！

桂 本当なんだ、あずさ！

あずさ え？

北見 幸恵も聞いてくれ。

桂 幸恵も聞いてくれ。

幸恵 え？

北見 私が桂さんをお願いして電話して頂いたんだ。

桂 私が桂さんをお願いして電話して頂いたんだ。

正和が現れる。場の異常な雰囲気戸惑い、隣へ行って泉を呼んでくる。

北見 おまえにも骨を拾ってほしいんだよ、あずさ！

桂 おまえにも骨を拾ってほしいんだよ、あずさ！

北見 だからお願いだ！

桂 だからお願いだ！

北見 もう少しここにいてくれ！

桂 もう少しここにいてくれ！

北見 あずさ！

桂 あずさ！

幸恵 ・・何ですか、これは？何のためにこんな手の込んだお芝居をなさってるんですか？

礼子 どうもすいません。

泉、正和、牧が現れる。

泉 ねえねえ、おばあちゃんがイタコになっちゃったって本当？

桂 そうなのよ・・不思議なことに、私には北見さんの声が聞こえるのよ。

幸恵 バカバカしい・・

桂 信じようと信じまいと、それはあなたの勝手です。しかしこれだけは言っておきますよ。事が事だけに、ひっそりと葬儀を行いたいというあなたの気持ちはわからないではない。が、これじゃあまりに寂しすぎませんか。

幸恵

桂 ……
お父さんも寂しい思いをされてるんじゃないですか。

幸恵 心配して頂いてありがとうございます。でも、これはウチの問題ですから…

桂 (強い口調で) 人の死というものは、誰か一人のものではありません。

桂 家族や親族のものでもありません。その人が生きている間に関わった全ての人達のもです。亡くなった方への思いは、関わった人の数だけあります。その思いを封じ込めることは誰にもできません。お父さんを愛し、お父さんに愛された人の思いが、今、ここにあるんです。せめてもう少しだけ、ここにいさせてあげてはくれませんか。

早紀 おばあちゃん…

亮太 おばあちゃん、どこがボケてんだよ…

あずさ あの…私…いいんです。帰ります。

桂 あずささん…

あずさ どうして私のことご存知なのか知りませんが、いろいろとお氣遣い頂きましたありがとうございます。でも私のことなら、いいんです、本当に。

北見 あずさ…

あずさ 私は、このお葬式は、幸恵さんのものだと思っています。幸恵さんはたった一人のご家族なんだし、私なんかより何十倍も長い時間を栄治さんと過ごされ、それだけの愛情を注がれていらっしやるんだと思うんです。だから私は、幸恵さんのやりたいようにやって頂くのが一番だと思います。それにも私に幸恵さんの立場だったら、やっぱり同じこと言うだろうなって気がします。普通そうですよ。自分と同じくらいの年の女引っ張り込んで何なんだって、怒りますよ。

あずさ でもね、幸恵さん。これだけはわかってほしいんです。勘違いされてるかもしれないんですが、私達、決して不倫してたわけじゃないんです。こういう言い方はちよつと照れますけど、れっきとした恋愛

人同士だったんです。ただ年がすごく違うということをのぞけば、そこらへん歩いてるカップルと全く同じだったんです。私は、栄治さんと知り合うことができてとてもよかったと思ってるし、後悔なんかしてません。実は私の周りに競馬好きな人って一人もいなかったんですよ。それに職業柄、競馬好きですなんておおっぴらに言えないじゃないですか。保険会社に勤めてるのにギャンブル好きだなんて、なんだかねえ・・・競馬だけじゃありません。栄治さんは、私に広い世界を見せてくれました。こんな田舎の小さな町で育った私に、栄治さんは世界に通じるいろんな窓を見せてくれたんです。映画という窓、ゲームという窓、パソコンという窓・・・そうだ・・・これ・・・

あずさ、紙袋の中から紙の束を出し、幸恵に渡す。

幸恵 何ですか。

あずさ ネットで栄治さんに寄せられた弔電です。プリントアウトしてお持ちしました。

幸恵 ネット？

あずさ 栄治さんが開いていたホームページに、たくさんのメッセージが寄せられました。

幸恵 これ、全部ですか？

あずさ 二万三千件のアクセスがありました。

幸恵 そんなに・・・全然知りませんでした。父がホームページ開いてたなんて・・・

あずさ、袋の中からビデオを取り出す。

あずさ それからこれ・・・これだけが心残りなんです・・・一緒に棺の中に入れてあげたらどうかって思ってたんですけど・・・

幸恵 何ですか、これ？

あずさ 「大草原の渡り鳥」。

正和 小林旭？

あずさ ご覧になったこと、ないんですか？

幸恵 ええ。

あずさ　もしかして・・・ご存じないんですか？
幸恵　何がですか？
あずさ　この映画に・・・お母様が出てらっしゃるんです。
幸恵　母が？
正和　「大草原の渡り鳥」に？
早紀　お母さん、女優さんだったんですか？
あずさ　ワンシーン・・・アイスクリーム屋の売り子の役で・・・
幸恵　・・・どんな場面なんですか？母はどんな顔をしていましたか？
あずさ　え？
幸恵　聞かせて下さい。
あずさ　はい・・・えっと・・・宍戸錠が・・・
正和　宍戸錠・・・
あずさ　ええ。宍戸錠がアイスクリームを買いに来るんですけど、お金を払わずに店を出て行こうとするんです。お母様は呼び止めます。「お客さん、お金、お金」って。すると戻って来た宍戸錠が、「おっといけねえ、忘れ物」って言って、お母様のほっぺにキスして去って行くんです。
正和　何様だ、宍戸錠・・・
あずさ　でもって、つりはいらねえよって・・・
正和　横暴だぞ、宍戸錠・・・
あずさ　でもお母様は、そんな宍戸錠の後ろ姿をうれしそうに微笑みながら見ているんです。その笑顔がとてもかわいくて・・・
幸恵　牧さん。
牧　はい。
幸恵　このビデオに間違いありませんね。父がずっとお借りしていたのは。
牧　間違いありません。「大草原の渡り鳥」。
幸恵　いつっておっしゃってましたっけ？父がビデオをお借りした日。
牧　ウチの店のオープン一周年記念日ですから・・・おとしの一月二十日です。
幸恵　間違いありませんね。
牧　間違いありません。
あずさ　もしかして・・・
幸恵　おとしの一月二十日は・・・母の命日なんです。

牧 つまり、お父さんは・お母さんがお亡くなりになった日から、ずっとそのビデオを借り続けていたということですね。

幸恵 そばに置いておきたかったんだと思います。若い頃の母が映っていた映画のビデオを・母が亡くなった日からずっと・そばに・一言言ってくれば・差し上げたのに。

幸恵 返すつもりだったのかもしれない。

牧 え？

幸恵 いつか返そうと思って借りたのに、ついつい毎日一回は母の顔がみたくなって・一日、また一日と延ばしてしまい、結局死ぬまで返せなかった。父はそういう人なんです。

あずさ ・・(うなづく)・

幸恵 あずささん。

あずさ はい。

幸恵 父がお世話になりました。

あずさ 幸恵さん・

幸恵 私・悔しかったんです。父をあなたにとられたような気がして・母が可哀想だなんて思いながら、本当はただ、あなたに嫉妬してただけだったんだと思います・ありがとうございます。父は幸せだったと思います。最期の時を、あなたと一緒に過ごすことができて。

あずさ ・・ありがとうございます。

幸恵 お願いします。ここにいて下さい。あともう少しですから。

あずさ はい。

幸恵 桂さん・どうもありがとうございました。

桂 どういたしまして。

隣の待合室から歓声が聞こえてくる。

泉 何だろう。

正和、見に行く。

北見 桂さん・ありがとうございます。

桂 作戦成功。

独り言を言ってるふうにしが見えず、周りの人々は困惑している。

亮太

(早紀に) やっぱポケてんのかな・・

正和、戻ってくる。

正和

すごいよ！九回裏、5―0から5―4まで追いついた。今2アウト二、三塁。こりや奇跡の大逆転かもしれない。よし、じゃあ皆で応援しに行こうか。

泉

皆、隣へ行きかける。

礼子

ちよつと待って。おばあちゃん。

桂

何だい？

礼子

おばあちゃん、北見さんの声、聞こえるって言いましたよね。

桂

言ったよ。

礼子

じゃあ浩介さんの声は？

桂

聞こえるよ。

礼子

浩介さんと話できる？

桂

できるよ。

礼子

私、おばあちゃんの言うこと信じます。浩介さんに、私の言うこと伝えて欲しいんです。

桂

いいよ。ちよつと待って。今、呼ぶから。直接話しかけてやっつくれ。おーい、浩介、浩介！

野々村、北見に押し出されるように前が出る。

桂

(わざと重々しく) お待たせいたしました。たった今、浩介殿が降りてらっしゃいました。

皆、あたりをキョロキョロ見回している。

早紀 本当？
亮太 どこ・・・どこの？
桂 こちらでございます。

桂、浩介を指さす。すると全員、その方向を見る。

泉 ちょっと、マジ？
桂 さあ、礼子さん。いいよ。言いたいことあるなら言っておやり。浩介、聞いてるから。

礼子 あなた・・・長い間ご苦勞様でした。あなたと出会ってから、二十五年。あつという間でしたね。亮太も早紀も大きくなりました。

あなたはほんと野球一筋でしたね。家族のことよりも野球優先。毎日帰りは遅いし、合宿や遠征試合で家をあけることも多かった。ううん、責めてるんじゃないの。私はそれがわかってて結婚したんだし、あなたの役に立ちたいと思って頑張った。ほんと頑張ったんだから。あなたが家にいなくても、私はあなたのこと、ひどいと思つたことは一度もなかった。

でもね、今は違うの。今はね・・・あなたのこと恨んでる。だつて・・・ひどいよ。あなた・・・ひどいよ。もつと一緒にいたかったのに・・・ずっとずっと一緒にいたかったのに・・・私・・・寂しい・・・寂しいよ！

最低！最低よ！あんたなんか最低の男よ！だって私よりも先に死んじゃうんだもん！あー、がっかりだ！あんたなんかと結婚しなきゃよかった！バカ！バカ！浩介のバカ！

バカ！

バカ！

バカオヤジ！

バカオヤジ！

ちつきしよう、バカオヤジめ・・・お母さん泣かせやがって！反省しろ！

反省しろ！

亮太 天国で安らかに眠れると思うなよ！

礼・早 そうだ、そうだ！

亮太 ずっとそのへんフラフラさまよつてろ！

礼・早　　さまよってろ！
早紀　　私達のそばにいる！
礼・亮　　そばにいる！
礼子　　わかったか！
亮・早　　わかったか！
礼子　　バカオヤジ！
亮・早　　バカオヤジ！
礼子　　あー、すっきりした。ありがとう、おばあちゃん。
桂　　浩介。
野々村　　え？
桂　　おまえの番だぞ。
北見　　野々村さん、ここは一発ガツンと言っておやんなさい。
野々村　　ガツンとって・・・
桂　　はい、皆さん、注目！
亮太　　何？
桂　　バカオヤジが何か言いたいことあるって。そこに座って。

礼子、亮太、早紀、何故か神妙に座る。

野々村　　・・・
桂　　・・・ほら・・・
野々村　　うん・・・
泉　　何、何？
野々村　　野々村家の皆様、
桂　　野々村家の皆様、
野々村　　親族並びに関係者の皆様、
桂　　親族並びに関係者の皆様、
野々村　　本日は誠にありがとうございました。
桂　　本日は誠にありがとうございました。
泉　　相変わらずカタいなあ。
野々村　　これが噂のイタコ状態？
桂　　ではバカオヤジから、家族の方々へのメッセーヂを、ごくごく手短かに述べさせて頂きたいと思えます。まずは、亮太。
亮太。

野々村 インドネシアも結構だが、
桂 インドネシアも結構だが、
野々村 身体には気をつけろ。
桂 身体には気をつけろ。
野々村 好きなことを思いつきやりなさい。
桂 好きなことを思いつきやりなさい。
野々村 そして、母さんをよろしく。
桂 母さんをよろしく。
野々村 早紀。
桂 早紀。
野々村 おまえは俺の娘だ。
桂 おまえは俺の娘だ。
野々村 可愛くて可愛くてたまらない。
桂 可愛くて可愛くてたまらない。
野々村 嫁になんいかななくていい！
桂 それはちよつと・・
野々村 おばあちゃん。
桂 おばあちゃん。私か。
野々村 俺を産んで、育ててくれてどうもありがとう。
桂 どういたしまして。
野々村 ま、この先、長くはないだろうけど・・
桂 大きなお世話だ。
野々村 皆に迷惑かけないように。
桂 皆、やさしくしてあげてね。
野々村 そして礼子。
桂 礼子。
野々村 ありがとう。
桂 ありがとう。
野々村 ・・ありがとう。
桂 ・・ありがとう。
野々村 他にないのかい。
桂 俺は・・いつまでも、おまえのこと・・愛してるよ。
桂 ・・・・

野々村

どうしたんだよ、早く言ってくれよ。

桂

あんたよくそんな恥ずかしいこと・

野々村

いいから！

桂

俺は、いつまでも、おまえのこと・愛してるよ。

野々村

恥ずかしい！

礼子、大声で泣き出す。

亮太も早紀も泣いている。

アナウンスが入る。

(江沢)

それではまもなく、骨揚げの時間です。ご遺族の方は、炉前ホールの方へお願い致します。

野々村家、北見家ともに、炉前ホールへ移動する。野々村と北見、お互いに見つめ合い、無言で握手を交わす。

炉前ホール。暗闇の中に江沢の姿が浮かび上がる。別な場所に野々村家、北見家の人々が浮かび上がる。

江沢
 それでは、竹の箸と木の箸を一本ずつ持って下さい。二人一組で骨をはさみながら、骨壺にしまつて頂きます。

江沢の指示に従い、両家の人々は、骨を拾い、骨壺に入れる。

江沢
 まず足の方の大きな骨からお願いします。二つか三つ拾い終わりましたら、次の方に箸を回して下さい。

箸を回し、骨を拾う。

江沢
 足が終わりましたら順番に上の方をお願いします。骨盤、背骨、肋骨、腕、歯、頭骨・・・そして喉仏は、最後をお願いします。

両家ともある程度、拾い終える。

江沢
 喉仏は、どうして喉仏というか、ご存知ですか？それは喉の骨が、ちようど仏さんが座って、手を胸の前で組んだような形をしているからです。喉仏が崩れずにきれいに残っている方は、生前たいへん良い行いをされた方です。ほら、ご覧下さい。お二方とも・・・あ・・・

両家の人々、のぞき込むが、どういう顔をしたらいいかかわらない。二人とも喉仏はボロボロに崩れている。

野々村家、北見家の人々、後片付けをしたり、互いに挨拶したりしている。

桂と礼子が一緒にいるところに幸恵がやってくる。

幸恵 どうも、いろいろとありがとうございました。

礼子 どうするんですか、これから。

幸恵 父の部屋に戻って荷物の整理してから、夜また会おうって言ってるんです。

桂 そう・・・

あずさ 私もこれから会社に戻ります。

正和がやってきて、

正和 お腹空いてませんか？お弁当ありますよ。

あずさ いえ、私は・・・

幸恵 あの・・・お弁当頂いていいですか？

正和 え？

幸恵 結局、お昼食べ損ねちゃって・・・

正和 なんだ・・・それならそうと・・・

あずさ あの・・・実は私もお昼まだなんです・・・

正和 言って下さいよ。はい、どうぞ。（弁当を渡す）
すいません。

幸恵 よし、あと二十一個。

牧がさりげなく早紀に近づき、

牧 （小声で）また一緒にカラオケ行こうね。
早紀 考えときます。

牧と入れ違いに泉がやってきて、

泉 気いつけた方がいいよ。こないだ、文房具屋のユカリちゃんとラブホテルから出てきたらしいよ。

早紀 マジですか？

泉 マジ、マジ。これ、美容院情報。

と、泉は去る。

早紀 電話してないなんて言ってたくせに・

正和と亮太が近くにいて、

正和 野球、やっぱ負けたって。

亮太 なんだ・

正和 また来年に期待するか。

亮太 来年は皆で応援に行きましょうよ。

正和 いいねえ。

亮太 一周忌、早めに帰ってきますから。

桂があずさ呼び寄せる。

桂 あずささん、ちよつと・

あずさ はい・

桂 北見さんからの伝言。

あずさ は？

桂 銀行にまだお金残ってるはずだから、後はよろしくって。

あずさ よろしくって・

桂 (メモを見ながら) 桜花賞とダービーはメモリーブロッサム、天皇

賞はサクラゴーストオーから流せって。わかった？

あずさ はあ・幸恵さんと相談してみます。

亮太が礼子に近づき、

亮太 お母さん・

礼子 何？

亮太 身体、気つけて。
礼子 何、それ。

早紀、幸恵に近づき、

早紀 あの・・・すみません。

幸恵 え？

早紀 東京でタレントプロダクション経営なさってるって・・・

幸恵 ええ。

早紀 名刺、頂いてもいいですか？

幸恵 東京来る時、連絡ちようだい。

早紀 いいんですか？

幸恵 お母さんに内緒よ。

早紀 ありがとうございます。

亮太が突然、大声を出す。

亮太 あのー・・・皆さん、すみません。

礼子 どうしたの？

亮太 どうでしょう・・・せっかくですから、記念写真撮りませんか？

正和 いいねえ。撮るか。

江沢、それを聞きつけ、

江沢 お早くお願いしますね。他の皆さん、マイクロバス待ってますから。

正和 じゃあ野々村家集合！

亮太 いえ、そうじゃなくて・・・

泉 何？

亮太 皆で撮りましょうよ。ここにいる皆で。

桂 いいねえ。ナイスアイデアだよ、亮太。

亮太 (窓のあたりを指して) さあ、その窓の前のところに並んで下さい。

礼子 幸恵さん、あずささん、さあどうぞ。

あずさ

でも・・

幸恵

行きましようよ、あずささん。

礼子

牧さんもどうぞ。

牧

はあ・・

早紀

管理人さんも、どうぞ。

江沢

私もですか？

皆、ガヤガヤ言いながら集まってくる。

亮太

イメージは「蝶の谷」です。

正和

何だそれ。

亮太

インドネシアのスラウエシ島という所に、「蝶の谷」と呼ばれる場所があるんですけど、そこは、種類の違う様々な蝶が、水を飲みにやってくる場所なんです。大きさや羽の色の違う蝶達が、まるで同じ一族のように集まって水を飲み、羽を休める場所なんです。ではいきますよ。いいですか？ はい、蝶のスマイル！

一同、笑顔になる。

亮太、シャッターを押す。いつの間にか、野々村と北見が、

皆の後ろから顔を出している。

音楽。桜が舞い落ちる。

幕